

川端康成とバルザック

私市保彦

一、バルザックの「アディユ」から「たんぽぽ」へ

川端康成とバルザックの関係というと怪訝に思う人が多いと思うが、少なくとも川端康成の遺作「たんぽぽ」を読むかぎり、川端康成がバルザックの短編「アディユ」を意識しながら「たんぽぽ」を書いたことは疑えない事実であり、川端自身それを作中でほめかして、その対比を通して川端文学の特性が鮮やかに浮かび上がってくる。このテーマについては別の文脈できわめて簡単にふれたことがあるが、あらためて康成の他の作品とバルザックとの接点も浮かび上がってきたので、川端康成没後五十年という区切りの年でもあり、ここに詳述したい。¹⁾

佐伯章一は、新潮社版の『たんぽぽ』の透徹した解説で、当然のことながら『たんぽぽ』から「片腕」や「眠れる美女」などを連想している。²⁾ 物語の中心人物の木崎稲子は、「人體缺視症」という病にとりつかれた若き女性として登場する。この聞きなれない病名はむろん作者が考えたものだが、康成が人體フェティシズムともいべき執

着で人體に異常に病的で幻想的な感覚をいだいていたことはよく知られていて、「眠れる美女」とか「片腕」はその種の傑作である。「片腕」では、体から取れた女の右腕を男が持ち歩き、はては自分の右腕のかわりに娘の右腕をつけかえて、寝こんでしまおうという異常な場面が描かれている。

ふと目が覚めると、不気味なものが横腹に触っていたのだ。私の右腕だ。

私はよろめく足を踏みこたえて、ベッドに落ちている私の右腕を見た。呼吸が止まり、血が逆流し、全身が戦慄した。私の右腕が目についたのは瞬間だった：次ぎの瞬間には、娘の腕を肩からもぎ取り、私の右腕とつけかえていた。魔の発作の殺人のようだった。⁽³⁾

こうして私は、投げ捨てられた娘の片腕を拾い上げると、「いたいけな愛児を抱きしめるように胸にかく抱きしめ」、「娘の指を脣にくわえた」と語る。⁽¹⁾ むろん、この物語の対になるのは「眠れる美女」であるが、いずれのばあいも、女體へのフェチシズムを描いて余すことがない。

「人體缺視症」という奇病も、人體へのマイナスのフェティシズムではないか。稲子は、幼少の頃から人體が見えなくなるという奇病の持ち主であると語られる。奇病は高校生のとき卓球の試合中にピンポン球が見えなくなるという前兆ではじまり、やがてここぞという大事な時に相手が見えなくなるという症状になる。婚約者の青年久野とのつきあいでも、いざ抱擁というクライマックスで相手がみえなくなるのである。その現象は、未完のこの物語が中断される終わりの頁で、久野が回想する幻夢として語られる。

「ああつ、久野さんが見えない。見えなくなったわ。」と稲子ははじめ叫ぶやうに言った。額を左手でおさえて、しきりに目ばたきをした。「久野さんの肩がなくなったわ。ああ、口もあごもなくなったわ。」

久野の口から下、肩も胸もふうつと薄れて消えたのであった。その空虚にもやもやと弓形がゆれて、桃色の気泡の虹となったのであった。稲子のおそれはそれを見るふしぎさでやわらいだ。

この時は久野と稲子は抱き合ってはみなかった。離れてゐた。久野は窓べに立ってゐた。……（中略）……明かりはつけ忘れていた。気泡の虹の桃色は濃くないけれども淡い光をおびていて、あたりを明るくした。やわらかいがあざやかな印象で浮んだ。

「虹に乗ってらっしゃるわ、久野さん。」と稲子はいった。

（たんぼぼ）

稲子は久野の四階のアパートの部屋にいて、久野は曇り日の夕暮れの窓辺に立っていると、気泡の虹の桃色で明るく照り映えるなか、久野の体は虹の向こうに浮かびながら、「肩から下のからだ、いや口までが虹に消えて」いる。しかし、稲子は恐怖に怯えているどころか、「虹のふしぎな美しさに稲子はまぎらわされた」とある。ここでは抱擁の際に男のからだは消えて、あたかも虹と化しているようだ。

現象としては、久野の身体が虹と一体化しほとんど虹の桃色の気泡となって、まるで身体が虹のイメージに昇華したようである。

そもそも川端は、ヒロインをさまざまな形で抽象化し象徴化し、脱実在化するという手法に長けている。というより、肉体のレベルでの性交渉が描かれることはない。例えば『千羽鶴』では、男と太田未亡人との性的交渉がリ

アルに表現されることはない。『雪国』でも、冒頭の「国境の長いトンネルを抜けると雪国であった」という汽車の車中で「これから会いに行く女をなまなましく覚えていく」人差し指を窓に動かして眺めていると（駒子との肉体関係を示す描写はこれのみ）、女の片目が映って驚くが、それは斜め向かいに座っている葉子の目だった。その目は野山のともし火と「解け合いながらこの世ならぬ象徴の世界を描いていた。」とある。この娘がやがて、男とつかず離れずの交渉を持つ駒子の近くに出没する葉子だった。この葉子こそ男にとつての「美神」であり「アニメ」であり、男は葉子の姿を見るたびに心がさわぐが、最後に葉子は火事に見舞われて二階から身を投げて、ほとんど水平に落下する。

葉子を落とした二階棧敷から骨組の気が二三本傾いて来て、葉子の顔の上で燃え出した。葉子はあの刺すように美しい目をつぶっていた。あごを突き出して、首の線が伸びていた。火明かりが青白い顔の上を揺れ通った。幾年か前、島村がこの温泉に会いに来る汽車のなかで、葉子の顔のただなかに野山のともし火がともった時のさまをはっと思い出して、島村はまた胸が顫えた。一瞬に駒子との年月が照らし出されたようだった。なにかせつない苦痛と悲哀もここにあった。（『雪国』）

死にゆく葉子の顔が、野山のともし火と二重に汽車の窓に浮かんだ葉子の顔と重なった瞬間にはじめて男は葉子の実在を発見し、それとともに駒子との歳月が照らし出される。こうして『雪国』での男女の営みは窓ガラスに映る野山の火明かりと一体となり、実在が美しくも妖しい映像となって終わっている。あたかも、これは「たんぽぽ」で男の身体が虹と一体となる映像のようではないか。ここには、虚と実が一体となっているイメージがある。これは、

身体のマイナスのフェチシズム等々の言説を超えた美の世界であろう。「たんぽぽ」での「人體缺視症」も、単なる病的な症状というより川端に内在する美学的志向そのものと思うべきではないか。

「たんぽぽ」の世界では、あらゆる場面で川端の美学的志向、あるいは美学的境地が描かれている。そしてその境地こそバルザックと対峙しているものであり、川端はそれを意識し、それを表現しようとしている。

* * *

話に花をちりばめることの多い川端は、ここでは「生田の町はたんぽぽが多い」と語りをはじめ、しかも町には「高齢者が三百九十四人ある」としながら、「この生田の町にふさわしくないものが、一つある。気がひ病院である」と受けている。⁽⁹⁾母と久野は稲子の症状の治療を精神医にゆだねようと稲子を預けて、「生田川の岸の道を町においてゆくと、丘の上から梵鐘の音が流れる」と転じて、暖と柔の「たんぽぽ」の世界は硬質で静謐な仏界に転換する。⁽¹⁰⁾そして、その後の筋書きはふたりの対話を通して進行してゆく。「たんぽぽ」の初版の解説で、佐伯章一は、生田という町の呼称の象徴性を腑分けして、物語の真奥に仏界と俗界の対照と交錯があるとし、⁽¹¹⁾また森本稜は「たんぽぽ」試論で、物語を生田伝説・三井寺伝承に重ね合わせて、物語の深層を探ろうとしている。⁽¹²⁾いずれも、「たんぽぽ」の解説に必須の論考であるが、ここではバルザックとの対比のみに焦点を当てることにする。それでも、川端文学の特徴と意図はくつきりと浮び上がってこよう。

作者はすばりバルザックの名を作中で挙げていたので、まずそのくだりを引用してみよう。稲子の父は退役軍人で、退役後はしきりに乗馬に興じ、稲子にも乗馬をさせていた。一方、教養ある読書人のようでもバルザックなどを読み、その一節を諳んじていて妻に聞かせていたとある。

「四十歳の女は君のために一切をしてくれるだろう。しかし、二十歳の女はなに一つしてくれない。」

この言葉がはっきり今木崎の聲で聞こえた。その翻訳本の名を稲子は忘れたが、木崎は読んでみてこの言葉に出会ふと、「おい、おい。」と読んで聞かせた。

「バルザックだよ、バルザック。」と木崎は言った。「うん、バルザックのことは、お前の方が、先刻よく御存じだらうがさ、この言葉は知らんだらう。いいか。四十歳の女は君のために一切をしてくれるだろう。しかし、二十歳の女はなに一つしてくれない。どうだ。」⁽¹³⁾（「たんぼぼ」）

これは、稲子の母は久野と病院を出てから、とおりすがりの宿にふたりで泊まり、隣り合わせの部屋で言葉を交わしているときに、「白絹につつまれた膝のふくらみに目を落とした時に」、思い出された言葉だった。⁽¹⁴⁾そもそも、娘の許嫁とはいえ若い青年と未亡人が同じ宿に泊まるという設定であるが、この危うい泊まりとバルザックの言葉には深い関係がある。というのは、木崎が口にした言葉は若妻と青年の愛にまつわる物語、バルザックの『谷間の百合』からの引用であるからだ、これについては後段でふれることになる。

ところが、じつは「たんぼぼ」に隠されているバルザックの小説は『谷間の百合』ではなくて、「アディユ」という短編なのだ。⁽¹⁵⁾それは、「アディユ」の筋書きを紹介すれば、分かることであり、この関係についても川端はわかるように取り入れている。

* * *

「アディユ」は、ロシアに侵略したナポレオン軍がモスクワ大火やらきびしい「冬將軍」に負けて敗走し、「プレジナ渡河作戦」と呼ばれる壮絶な撤退作戦の悲劇的なドラマを題材にしている。プレジナ河は、現在プーチンによつ

て侵略されているウクライナの隣国のベラルーシに流れる河で、ナポレオン軍は敗走中にここでロシア軍に攻撃され、多数の軍勢を失った。その結果六〇万を擁したフランス軍がかるうじて帰国したときには、わずか五千人になっていたと伝えられている。

物語の主人公ステファニーは、夫のヴァンディエール伯爵とともにフランス軍に加わっていた。当時は、妻をもなつて将校が出陣するのはよくあることだが、あろうことか同じ軍に幼馴染みでひそかに愛し合っていたフィリップ・ド・シユシーも隊長として従軍し、ステファニーを戦乱から守っていたという設定になっている。その日、フランス軍は大挙して敗走し、後衛軍のフィリップの部隊は、背後からはいつロシア勢から襲われるかわからない。寒さと飢えに襲われ、馬をつぶして飢えを癒やしながら退却し、やがて氷片が流れているブレジナ川を渡ねばならない。架橋兵たちが架けた橋も燃え落ちるといふ大混乱のなか、フィリップたちが崩れた橋材や馬車の車輪やあらゆるガラクタを集めて筏が組み立てると、大勢の兵たちがその筏に競つてつめかけ、立錐の余地もないほどになった。混乱の中フィリップはやつと擲弾兵てきだんの助けを借りて、ステファニーと夫のヴァンディエール伯爵を乗せ、自分は岸に残った。

筏は、フィリップが身じろぎもせず立ちつくしている岸の対岸に向かって、激しい勢いで突進した。筏のはしに立っていた伯爵は川に転げ落ちた。川に落下した瞬間、ひとつの氷片が伯爵の頭を切断し、それを弾丸のように遠くに投げた。

「なんてこった！ 隊長殿！」 擲弾兵が叫んだ。

「さよなら」アディユ 女が叫んだ。

フィリップ・ド・シユシーは恐怖で凍りつき、寒気と悔恨と疲労に打ちのめされ、ぱったり倒れた。(「アディユ」)

こうして、ステファニーの夫のヴァンディエール伯爵の首は氷片に切られて、川に流されていき、川向こうでそのさまを目撃したフィリップは倒れ、ふたりは生き別れになってしまふ。

しかし、物語はこの惨劇からはじまるのではなく、その後コザック兵に捕まりシベリア送りになって生き延びてから七年経ったフィリップが、退役将校としてパリの北三十キロほどのリラダンの近辺で友人と狩をしているときに、気が触れている女性にぱったり出会うところからはじまる。その女こそ戦場で別れたステファニーの哀れな姿だったのだ。

女は黒繻子の服をまとい、伸び放題の髪の毛は巻毛となって顔と体に垂れ、野生の動物のようにリンゴの枝に飛びついて果実をかじるのだった。やがて、女の伯父の医師の口から、彼女こそステファニーの変わり果てた姿であると分かる。彼女は悲惨な撤退作戦で夫を失ってからというもの、敗残兵と放浪したり、多くの男の慰み者となり、施療院に保護されたりするうち、フィリップに彼女を託された擲弾兵に出会うことができたが、その彼にも死なれたあげく正気を失い、話すことといったら「さよなら^{アディユ}」という言葉だけ。そして今は、彼女を見出した医師の伯父に保護されている身だった。

彼女がベルジナ川で生き別れになったステファニーだと分かったフィリップの衝撃は計り知れなかった。そして、なんとか彼女の正気を取りもどせないかと考え抜いたあげく、思いついたのは、なんと往事の「渡河作戦」の戦場を彼女の前に再現して、失った記憶を取り戻そうという試みである。

彼はそのため、川のある自分の領地にさらに大きな運河を作り、当時の地形さながらに造営し、自分も当時の軍

服に着替え、数百人の農夫をやとつて兵隊に仕立て、筏を組み立て運河に浮かべ、当時を彷彿とさせる模擬戦をおこなったのだ。まさに一大ページェントである。その結果はどうなったか？ 以下引用する。

ステファニーの美しい顔に血色が浮かんできた。知性が輝いてきて、炎が燃え上がるように生命感と幸福感が徐々によみがえってきた。痙攣のような震えが、足の先から胸まで走った。ついでこの現象は、生まれた瞬間のこの世ならぬ光を生き生きとした光彩をステファニーの瞳が放ち、からだ全体に切れ目なく広がった。彼女は生きていた！ 彼女の心はよみがえった。彼女は震えた。おそらく恐怖であろうか！ 神が凍りついていたことばをふたたび溶かし。消えた魂に新たな火をあたえた。人間らしい意志が、激しい電流のようにほとばしり、あまりに長く不在にしていた体によみがえった。

「ステファニー」大佐は叫んだ。

「あー、フィリップね」哀れな伯爵夫人は呼びかけた。

彼女は、大佐が差しのべたふるえる両腕に飛びこんだ。ふたりの抱擁は見ている人々をおびえさせた。ステファニーは泣き崩れていた。突然その涙は乾き、雷に打たれたように硬直し、かすかな声でいった。

「さよなら、フィリップ。愛しているわ！ さよなら」

「おー、死んでしまった」腕をほどいて大佐は叫んだ。(「アディユ」)

その翌日、フィリップはピストルで頭を撃ち抜いて自殺したと告げて、この悲劇的な物語は終わる。

「アディユ」が「たんぼぼ」の下敷きになっているというのは、二点ある。第一に稲子の父親の死に方である。

稲子の父は元陸軍将校で、フィリッピンの戦線で片足を失い、終戦後は義足で乗馬倶楽部の教師をつとめ、稲子も監視役のように付き添いながら乗馬を習っていた。その父が海岸を稲子と乗馬で散策していた時に稲子の目の前で崖から真つ逆さまに海に落下してしまったのだ。

道の海がはを走っていた父の馬が足をすべらせるとたんを、稲子は見なかった。

「ああつ。」と叫んで目をふさいだとき、馬と父は高い崖から海に落ちつつあった。父は馬の首に両手で抱きついてゐた。馬は四本の脚を空にもがきをどらせてゐた。断崖絶壁であるが、ごつごつと岩のでこぼこで、なかほどに大きく出張った岩があった。その岩にぶつかるとひびきが、無論聞えないが、稲子を刺しつらぬく痛みが傳はったとき、馬と人は離れた。馬が腹を見せて先に落ちて行つた。その馬の首は腹の方へ弓なりに固くまがつてゐた。人間の父は横さまに落ちて行つた。そして首の方が下に傾きかけると、「義足がはずれた。」と稲子ははつきり感じた。大きい岩にぶつかったときにはづれたのであろうが、はづれたと感じたのが、あんな場合のこととして、稲子ははつきり後から思つてみると、ふしぎといういふよりも、こはくてならなかった。左足は真直ぐに突張つてゐた。乗馬ズボンのなかであるが、左足は人間と縁切れして、死であつた。

紺碧の海に水しぶきがあがつた。人間は沈んで浮ばなかつた。馬は泳ごうとして足で水を掻いたが、いつのまにか動かなくなつた。稲子は氣を失つた。⁽¹⁸⁾

このくだりでは馬もろとも崖から海上に落下するさまはリアルな筆致で描写されている。落下したあとの父親は、「人間は沈んで浮ばなかつた」というように、海の底に消えてしまつている。事故のあと遺体の捜索が行われなかつ

たのかと疑問が起きるが、馬の遺体は浮かんでいたが父の遺体は消えてしまっていると語られている。これは稲子の、「人間は沈んで浮ばなかった。」というくだりであるが、一方これまで具体的に状況を目にし、記憶していることには母としては疑念を持つているとも母は久野に語っている。そして、父が「果たして沈んでしまったのかどうかもわからない」ともいう¹⁹。人の遺体は消えてしまったのだ。身体が無になるというのは、この物語のテーマであるから、ここでもそのテーマが据えられている。しかも、このショックで稲子の「人體缺視症」の症状がはじまったという見方はほぼ否定されているばかりか、じつは早くも高校二年のときに卓球しているとピンポン球が見えなくなつて騒ぎをおこした挿話も出てくる²⁰。作者は「人體缺視」というより「人體缺如」を、人體は無であり、消えゆくものであることを語ろうとしているようだ。

この場面を語る前に、二人はいうにいわれぬ純粹な少年と出会うというひとこまがある。母親は「妖精にちがいない」とまでいつて感動するが、少年が目に入らなかつた久野はそれに同意しない²¹。一方、久野が白ねずみを見たというと、夫人は見えていないという。一瞬の挿話だが、ここにも「無」と「有」のあいだに浮遊するといったテーマのバリエーションがある。このように物語には、「人體缺如」という大テーマをめぐっていくつもの小モチーフがとりまいている。

父の遺体が消滅し最後まで見つからないのは、いちばん大事なものは見えないというテーマではないか。バルザックの物語では、妻の目の前で刃物と化した流れる氷片で夫の頭が切り落とされるといふ惨劇になっているが、川端はそれとは、まったくちがう場面を描こうとしている。稲子の父は戦場ではなく、海岸を稲子を従え乗馬で散策している。

「アディユ」ではフランス軍が飢えのため馬をつぶして食べながら退却している最中に、大河を筏で渡る時に夫

の将校は川に落下している。これが第一のちがいである。

第二のちがいは、まさに決定的なものである。娘は、敗残兵と放浪したり、敗残兵と放浪したり、多くの男にはずかしめられたり、治療院に保護されたりしたあげく故国にたどりつくが、恋人と再会したときにはすでに正気を失っている。その後の治療は、前述したように退却時の渡河作戦の戦場を再現するというじつに大仕掛でリアルな方法である。

一方、母親と青年は稲子を精神病院にあずけて治療しようとしている。ここにも、バルザックとの決定的な相違点がある。前後するが、先ほどの父親の落下シーンを語る場面の前であるが、久野が父親の落下事件が起きたその道を稲子と自分が馬に乗ってとおるのはどうかと母に話すと、母はこういう。

「どう？」と母はうなずいたけれども、「稲子をつれて、その場所を、久野さんと騎馬で通らせて、稲子の父の死にたいする心の悲しみや責め苦を治してやろうというおつもりなの？ 神経科か精神科に、そんな治療もあるようですわね？」（四十頁）

これは、明らかに事故の状況を再現してヒロインを正気にした「アディユ」でバルザックが描いた療法を念頭においているのは明らかである。こうして、母は最終的に「病気にはお医者さんよ」といって、久野の提案をしりぞけてしまう。

しかし、この療法をめぐる問題は、父親の落馬事件同様に、母親と久野の長い対話の中に嵌めこまれているので

ある。じつは、病に稲子を預けてからの物語は、ほとんど二人の対話で構成されている。対話体による物語は川端が得意にするところだが、「たんぼぼ」では、いわばディアローグのシークエンスによる物語である。しかもふたりの対話のなかに、母親と稲子の対話、母親と主人の退役将校の対話、稲子と久野の対話が入り込まれている。三対の対話のシークエンスであるが、その全体が母親と久野の対話に包みこまれ、それぞれがモノローグのように自己の心象を語っている。あたかもそこで作者の心像が分化し、ひとつのイデーの変奏を奏でているようなので、長大な入子構造の内的モノローグといってもよい。その意味で、ジェイムス・ジョイス流の意識の流れに比すべき作品だといえなくもない（川端は、昭和八「一九三三」年にモデル小説を書いたのではない例としてイブセンとジョイスの名を挙げている―「末期の眼」一四ページ、岩波文庫『川端康成随想集』）。

ではそのシークエンスの主題はなにかというと、「実」と「無」は盾の両面、いわば「空即是色」であり、仏教的・東洋的・日本的なイデーをめぐる対話となっている。それを川端は繰り返し語っている。例えば、久野は歩いているうちに白鼠を見たといい、母親はそんな鼠がいるはずはないと否定し、一方母親は途中でこの世ならぬ美しさの少年に出会ったといい、ともに歩いてきた久野はそんな子供には会っていないと否定している。また稲子の父は、日本の敗北を知っておそらく自殺しようとして大きな樹木に自分の名前を彫りつけているところに若い娘が現れ、憔悴しきっている自分を助けてくれたという話を妻に語っているが、それは幻覚ではないかという疑惑を母と娘は否定できないでいる。こうした挿話群の頂点に海に落下した父親の死体の消失があるのではないか。そもそも、稲子は衝撃を受けたので落下事件そのものの記憶の有無までも話題になっっている。近藤裕子が示唆しているように「作家案内」、講談社文芸文庫『たんぼぼ』²³）あるいは佐伯章一が「人體缺視症におかされた少女が、さらにその場から欠落せしめられているという」²⁴（新潮社『たんぼぼ』解説）と語っているように、稲子という主要人物が会

話にしか登場しないことを思うと、「たんぽぽ」はまさに空無で成立している物語であろう。

ここで、バルザックの小説世界を想起すれば、バルザックの『人間喜劇』の世界は無数の人物によるディアローグと行動と葛藤の世界であり、バルザックが死の寸前にビアンションという作中の医者の名を呼んだという逸話まで残っている通り、バルザックは創造した人物が現実には生きていたのだと思ひ込むほどだったのだ。「アディユ」の主人公にしても、父の首が氷片で落とされるといふ記憶をリアルな場面の再現で娘の記憶の想起をうながし、それで事実娘は正気を取り戻すという物語である。ただし『人間喜劇』には「神秘の書」という小説群があつて、ここではリアリズムと対極の神秘的世界が現出されている。その世界では、川端文学とのべつの接点が見れるが、それについては論考の第二部でふれることになる。

話をもどすと、母親は青年が提案する事故の場面を再現しようとする治療方法は無意味だと否定する。バルザックの「アディユ」の再現プログラムの否定である。その結果、久野も納得せざるをえなかったように、生田の病院の医師に治療を預けたのである。病院では、治療方法の一つとしてか患者に鐘をつかせて、心を鎮めさせるという方法を取り入れているようであるが、やがて、その鐘の音が生田に宿を取ったふたりの耳にも届いてくる。そして、鐘の音をめぐる対話がはじまる。

* * *

作者は、そもそも稲子を預けた生田病院を常光寺という寺院の境内に設定している。そして、患者に鐘を撞かしている。病院には主ぬしのような西谷老人なる者がいて、「仏界易人。魔界難入」という書ばかり古新聞に書いている。⁽²⁵⁾ こうした魔界に入れないでいるとされている老人の描写は意味深い。「仏界易人。魔界難入」は、長編『舞姫』では、バレリーナの妻と娘に男関係がある国文学者矢木の座右の銘とされ、また川端康成自身がこの言葉の雄渾な揮毫きこうを

残している所を見ると―滋賀県義仲寺蔵―、西谷老人には川端の影が潜んでいるかも知れない)、母親と久野は宿屋で稲子と老人がついているのちがいない鐘の音を聞いて、鐘をめぐる会話をひとしきりする。⁽²⁶⁾ふたりが病院を退出してからすぐ三時につくこととなつている稲子がつく鐘らしき音が聞こえていたが、その鐘の音は罪深い「問罪者」たる老人がついている鐘だと青年は主張するが、母親は「祇園精舎の鐘の音、諸行無常の響きあり」を引用して、鐘は狂つたようにつくものではないと反論する。⁽²⁶⁾ここにも、魔界と仏界の対立と並立が見られ、「たんぼぼ」の世界の奥行きが垣間見られる。その境で狂つた者、罪を犯した者でも鐘をつくことで救われるのだとすることで、事件の再体験で治療される「アディユ」と「たんぼぼ」のちがいは、ここにも主張されているようだ。

川端が、バルザックに対立させているもうひとつのテーマがある。それが川端とバルザックをつなぐべつの作品『谷間の百合』である。前述したように、稲子の父親はバルザックのその作品を読んでいて、その一節を妻の前で語りつけてみせるという場面をことさらに設定しているが、その意味はなんだろうか？ 母親がそのことを思い出したのは、宿で裾を包む白い絹の紐を緩めながらであった。そのとき前述のように、「四十歳の女は君のために一切をしてくれるだろう。しかし、二十歳の男はなに一つしてくれない。」という一句がはつきり聞こえたのだ。

この夫の言葉を読者にも唐突に聞かせている作者の意図は、これがバルザックのどの作品からであるかということと突き止めないとわからないであろう。文脈では、川端は読者がその意味を突き止めることを求めているようだ。

このバルザックの代表作は、青年フェリックス・ド・ヴァンドネスと年上の夫人との恋愛物語であり、日本では大正九(一九二〇)年に八木さわ子が邦訳して以来広く愛読されている。物語の前半に青年フェリックス・ヴァンドネスが舞踏会でモルソフに夫人に出会って熱烈な恋心を抱くという印象的な場面が描かれる。ところが夫人には気に染まぬ夫がいる。にもかかわらず貞潔な夫人は愛を求める青年とはプラトニックな愛を貫こうとする。そして、

青年に生きるためにはどのような心構えを持つべきかを諄々じゆんぜんに説く手紙を書く。稲子の父がひとつおぼえのようにおぼえているのが、その手紙に書かれたことばである。そのことばが稲子の父によって作中に引用されるには、作者の周到な仕掛けがあるようだ。つまり、稲子の母が久野という娘の許嫁と襖一枚をへだてて、休もうとしていたとき裾を包む白い布を見ているうち、夫の言葉を思い出し出している。そして、膝の白絹のふくらみに目を落し「女が男のためにする一切とはどういふことなのだろう」と述懐し、「人生の御馳走をいただけなくなつた」と嘆くその後の夫の荒れようを思い出し、「四十歳の女は一切をしてくれる」というがじぶんは夫になにもしてやれなかつたと悔やむ⁽²⁷⁾。

この悔やみは夫への悔やみであるが、じつは二重三重の屈折を川端は含ませている。というのは、『谷間の百合』にはモルソフ夫人は死の間際に青年と結ばれなかつた悔恨を狂気のようにさらけ出す有名なひとこまがある。霊と肉のたたかいである。ところが稲子の母は、いま襖一枚をへだてて青年という。そして男女のことは何ひとつ起こらず、襖をへだてて対話するだけである。一方、彼女は夫に何一つ尽くせなかつたと嘆いている。『千羽鶴』では男が母ばかりかその娘とも契りを結ぶところで終わるのに、ここではそんなことは起こらない。バルザックにある霊と肉の葛藤でもだえる女の姿はない。「たんぽぽ」はすべての実体を空無にする世界だからではないか。『谷間の百合』を提示することで、川端はそう語っているのではないか。

ここで、有名なノーベル賞受賞の際の講演のさいごで、明恵上人の『明恵伝』から「花、ほととぎす、月、雪、すべて万物の興に向かいても、およそあらゆることこれ虚妄なること、眼に遮り、耳に満てり」等々の、西行のことばなどを引いてから、次のように語っていることが思い出される。

日本、あるひは東洋の「虚空」、無はここに言ひあてられてゐます。私の作品を虚無と言う評家がありますが、西洋流のニヒリズムといふ言葉は当てはまりません。心の根本がちがふと思つています。⁽²⁶⁾

こうして川端は、東洋的な「無」の世界を遺産としてのごそうとしたのではないか。

二、「死者の告知」をめぐる川端とバルザック

さいごに余滴として、もうひとつの川端とバルザックの接点を語ろうと思う。推測に過ぎないが若き川端が白樺派に接近していたことを思うと、推測として片付けてよいかと思うからである。

紙面も無くなるので、単刀直入に問題を追つてゆこう。周知のように、川端自身は心霊術を単純に信じているわけではないといながら、心霊現象にからまる多くの短編を残している。これらの作品と心霊術との関連を網羅的に総合的に論じた羽鳥一英「川端康成と心霊術」⁽²⁷⁾、仁平政人「川端康成における心霊術とモダニズム」⁽²⁸⁾などがあるので、それらを参考にしていただきたい。

明治期に福来友吉博士が御船千鶴子などの超能力を使って「念写」の実験をして東大を追われたという事件があったが、その福来博士は大正期にも超常現象を追求していた。その中で多くの実験やそれを詐術とする事件が話題を賑わせていた。その流れのなかでフラマリオン⁽²⁹⁾の訳書が刊行された。そこにはさまざまな超常現象のなかで、肉親の死の告知のおびただしい事例が報告されている。川端がフラマリオン著・大沼十太郎訳の二著、大正十三(一九二四)年刊の『未知の世界へ』と、大正十四(一九二五)年アルス社刊の『死とその神秘』に読み耽ったこ

とはよく知られていて、とりわけ前者は、「白い満月」に部分的に引用されている。

カミーユ・フラマリオンについてはここで贅言を弄しないが、生来は天文学者であるフラマリオンは超常現象にも深い関心を抱き、前述の二大奇書をのこした。いずれにも、超常現象のおびただしい事例が紹介され、遠隔地で肉親の死を告知された多くの例も報告されている。

さて、死の告知をテーマにした川端康成の代表作に先ほど紹介した「白い満月」がある。物語は、肺病を病んだあとの保養で温泉場の別荘暮らしをしている男がお夏という女中を雇い入れているという出だしではじまる。お夏は大きな別荘で働いたこともあり、その坊ちゃんに本を読んであげていたことを聞くと、男はにわかには翻訳書を持ち出して夏子に音読させる。その書がフラマリオンの『未知の世界へ』で、「電光」の作用が人の精神の作用と同じであると説くくだりである。⁽³¹⁾つまり、夏子による死の告知や、父親ちがいの主人公とその姉妹の嫉妬や葛藤や嫉妬は、父親たちの霊によって引き起こされているのではないかという心靈作用を底流にした物語を導入するための引用であろう。⁽³²⁾そのあとで、お夏が父の死を幻視する場面がくる。主人公のもとにやってきた上の妹の八重子が、お夏が癩癩の発作を起こしてたいへんだと釣りに出ていた男に報告する。そこで男はお夏の元に駆けつけ、問いたすと、樵夫父親が筏に乗っていると自分を大きな声で呼ぶと、父が足を踏みはずして落ちて死んでしまったというではないか。

「それがはっきり見えたんだね?」

「ありありと見ました。」

「しかし癩癩の起こる時はいろんな幻が見えるんだそうだよ。」

「私のは癩癩ぢやありません。父が川へ落ちたからはっと思つて氣を失つたんです。」⁽³²⁾

これは死の告知であるばかりか、幻の父に声をかけるとその声で父が落下したというのだ。すると北海道にいる父は遠い地のいる娘の音が聞こえたということになる。作者はこの事件にからめて男が予感していた妹の静江の自殺事件の電報が届くので、作者は幻視や予感という超常現象の複奏を仕掛けている。

川端は自分としては心靈現象を信じているわけではないながら当時の心靈ブームを取り入れたのは確かである。同じような多くの実例をフラマリオンは数多く紹介している。そのひとつを『未知の世界へ』の第三章「瀕死者の場合に見る遠感(以、心傳的現象)」にある例を挙げてみよう。郵便局長夫人フェレー夫人からの手紙である。

可成り古い事ですが、まだ昨日の事のように記憶してゐます。其れは私には極めて印象の深いことですから、終生忘れ得まいと思ひます。一八五五年、クリミヤ戦争の時でした。當時、私はパッシイのラトウル街に住んでました(パッシイはバリ西北の地区)。或日の朝食時、丁度正午頃、私は地下室に這入つて行くと、太陽の光線は天窓側(天窓の仏語は *soudraui*)だが、原文は現在使われていない漢字の訳語になっているので天窓に直した)から流れ込んで裏の廊下を照らしてゐました。そして、その照らされてる所丈が恰も濱邊の砂の様に見えたのです。ふと見ると、其所に大隊長で出征した従弟が横たわつて居るではありませんか、私は怖ろしくなつて一歩も進めず、真蒼になつて、引き返し来て皆なに話しました。皆んなは嘘(原文のまま)、不思議な事だとは申しましたが、何も笑つて聴いてゐたのです。此の事あつて二週間の後、ソリエ少佐が死んだとの通知に接しました。彼はヴァルナー上陸中に病死したのです。其日は私が砂の上の彼を見た日と同じであつたのです。⁽³³⁾(カミーユ・フラマリ

オン『未知の世界へ』

同書にはこの種の死の告知の事例がおびただしく報告され、しかも多くは変事とともに起こったり、死の場面を目の当たりにしている。川端は、それと同様の事件を「白い満月」に取り入れたのであろう。しかし、筆者は死の感応をテーマにしたバルザックの「徴募兵」からの波動があったとも推測している。その推測には根拠がないわけではない。「徴募兵」の初訳はバルザックの専門家水野亮による大正十二（一九二三）年一月の「白樺」に掲載されている。一方「白い満月」は二年後の大正十四（一九二五）年の「新小説」が初出であって、フラマリオンの訳書と同時にあるが、一方当時川端は白樺派に接近していたということがあり、又大正十二年から二十年間ほどつづいた評論活動を通して多くの作品を読んでいたので、雑誌「白樺」を読んでいたのはほぼ確かであろうと思われる。とはいえ、「徴募兵」は死の告知というより母子の死の感応の物語である。短編ながら筋書きは複雑で、大革命の混乱期にド・デイ伯爵夫人の息子は王党派の兵士として戦っている息子から、革命派に囚われているが脱獄して家に戻ってくるという知らせが届く。ところが息子が家にくると覚^{おぼ}しき時に革命派の徴募兵のひとりが町にやってきたのだ。町長はその男を保護して夫人の邸に泊まる許可を出す。夫人はやってきた兵士が息子でないことにすぐ気づいたが、町長の宿泊許可証があるので息子のために用意した料理もベッドも息子とは別人に与えねばならなくなった。絶望のなかで自分は屋外の温室で一夜邸を過ごし、朝方自分の部屋にもどるやそこで即死していた。

伯爵夫人の死は、非常に激しい感情から、そして疑ひもなく恐ろしい幻覚から来たものであった。カラントンでデイ夫人が死んだ時とかつきり同時刻に、モルビアン州で彼女の息子は銃殺された。（下部アルタアニュ地方）

この悲惨な出来事は、空間の法則を無視する交感についてのあらゆる経験の中に、すなわち二三の孤独の土が学究的な好奇心をもって蒐集しつつある記録の中に加えることができるであらう。そしていつかは此物語も、天才を今日に至るまで缺く一つの新しい科学の基礎を据えるに當つて、役立つものであらう。⁽³⁴⁾（水野亮訳「徵募兵」、「白樺」第十四号、三六頁、大正十二（一九二三）年）

この物語は、『人間喜劇』のうちの「哲学小説集」中の「神秘の書」に収められていて、「神秘の書」は文字通り日常的なりアリズムの世界ではなく、超常的な世界の物語である。とりわけ神秘思想家スエーデンボルグの影響が著しい。「神秘の書」にある「セラフィータ」はスエーデンボルグの影響のあとがある両性具有の物語であり、神秘思想を展開する「ルイ・ランベール」は夭折した天才の物語であるが、この天才は子どもときからスエーデンボルグの『天界と地獄』に読み耽つたとされている。その数々の逸話のなかに、過去の有名な超常現象について語るくだりがある。例えば、独特な幻視力をそなえたイタリアの医者・哲学者のカルダーノや、新ピタゴラス派の哲学者・占星術師のアポロニスは「ローマで起こった暴君の死をみながら死のまぎわの責苦を描写してみせた」等々とある。⁽³⁵⁾スエーデンボルグも有名な霊能者で、数多くの遠隔透視や霊界への往還をやつてのけ、カントやゲーテやバルザックやユゴーなどの信奉者が生まれた。というわけで、ルイ・ランベールはバルザックにとつて、遠隔透視は不思議でもなんでもないことであつて、そこで引用した「徵募兵」の締めくくりの言葉がある。一方、川端が「ルイ・ランベール」を読んでいたどうかは不明である。同書の本格的な初訳は昭和八年の河出書房『バルザック全集』第十三巻の豊島与志雄・蛭原徳夫訳であるから、少なくとも大正十四（一九二五）年の「白い満月」執筆時には未読のはずである。なお、日本におけるバルザック流行の関心はプロレタリア派によるレアリズム文学とし

て読むということがあり、神秘思想家の面については、軽視されていたという歴史もある。

「ルイ・ランベール」では、バルザックは「電気の構成原理が、われわれの〈観念〉や〈意欲〉特殊な流動体に土台としてはいりこんでいないかどうか？」と問いかけるランベールの「意志論」の趣旨を紹介しているが、この考えは川端が「白い満月」で引用したフラマリオンの文章と同じ内容である。フラマリオンの心霊術の時代のはるか前にバルザックをその思想を予告していたのだ。そこで、「徵募兵」の末尾を、「この悲惨な出来事は、空間の法則を無視する交感についてのあらゆる経験の中に、すなわち二三の孤独の士が学究的な好奇心をもって蒐集しつつある記録の中に加えることができるであらう」と締めくくっている。「そしていつかは此物語も、天才を今日に至るまで缺く一つの新しい科学の基礎を据えるに當つて、役立つものであらう」とルイ・ランベール＝バルザックは語り、肉親・知人の死の告知や死の感応はごく当たり前のことだとも述べている。川端は、雑誌「白樺」掲載のバルザック「徵募兵」の筋書きと末尾のこのくだりに興味を引かれたにちがいないというのが、筆者の推理である。なお川端も、スエーデンボルグの神秘思想にも関心を持っていたとも憶測されている。スエーデンボルグの代表作『天界と地獄』は鈴木大拙によつて早くも明治四十三年に邦訳され広く読まれていて川端も読んだ可能性も否定できないが、目下のところこれは憶測にすぎない。

いずれにせよ本論考の中心はあくまでも(一)の「たんぼぼ」と「アディユ」の対比論であり、いかに川端がバルザック的なりアリズムに対して西欧的な虚無思想ではなく東洋的な「空」の世界を表現しようとしたかを論じたものであると最後に念を押ししておきたい。しかしそれとともに、(二)で紹介したような怪奇・幻想短編のたぐいを通して、川端が合理主義的知的体系を確立しようとしていた明治以来の近代化路線から逸脱して、泉鏡花や柳田國男のように、前近代の呪術的・民俗の世界に踏み込んでいたことも忘れてはなるまい。

(注)

- (1) 「斬首ファンタズム」(「後期」十八号、二〇二二年七月)の一部で「アディユ」と「たんぼぼ」の関係について簡単に取り上げたことがあるが、本論で本格的に論じる機会を持った。
- (2) 佐伯彰一、「解説」、一九〇頁、『たんぼぼ』昭和四十七(一九五二)年、新潮社。
- (3) 川端康成、「片腕」、五七二頁、『川端康成全集』第八卷、新潮社、一九八一年。
- (4) 同書、五七三頁。
- (5) 川端康成、「たんぼぼ」、五七三〜五七四頁、『川端康成全集』第十八卷、一九八〇年、新潮社。
- (6) 同書、五七四頁。
- (7) 川端康成『雪国』十一〜十三頁『川端康成全集』第十卷、一九八〇年、新潮社。
- (8) 川端康成、同書、一四〇頁。
- (9) 川端康成、前掲書「たんぼぼ」、四三九頁。
- (10) 同書、四四〇頁。
- (11) 佐伯彰一、前掲書。
- (12) 森本穂「「たんぼぼ」試論―生田伝説・三井寺伝承を中心に―」、『日本文学研究資料27川端康成』、二〇九―三二九頁、一九九〇年、有精堂。
- (13) 川端康成、「たんぼぼ」前掲書、五六五頁。
- (14) 同書、五六五頁。
- (15) Balzac, Adieu, 1830 (初出)
- (16) Balzac, Adieu.
- (17) Ibid.
- (18) 川端康成、「たんぼぼ」前掲書、四七五〜四七六頁。
- (19) 同書、四七六頁。
- (20) 川端康成、「たんぼぼ」前掲書、五二一〜五三〇頁。
- (21) 川端康成、「たんぼぼ」前掲書、四八三〜四八四頁。

- (22) 同書、四六六頁。
- (23) 近藤裕子、「作家案内」、講談社文芸文庫『たんぼぼ』、一九九六年。
- (24) 佐伯章一、前掲書、一九二頁。
- (25) 川端康成、「たんぼぼ」前掲書、四四二頁。
- (26) 川端康成、「たんぼぼ」前掲書、四九七頁。
- (27) 本文五〜六頁参照。
- (28) 川端康成「美しい日本の私」、三五八頁、『川端康成全集』第二十八卷、一九八二年、新潮社。
- (29) 羽鳥一英「川端康成と心霊術」(「国語と国文学」、昭和四十五(一九七〇)年五月号)。
- (30) 仁平政人「川端康成における心霊術とモダニズム」、『川端康成スタディーズ』、平成二十八(二〇一六)年、笠間書院。
- (31) 川端康成「白い満月」二五四頁、『川端康成全集』第二卷、平成十一年。
- (32) 川端康成「白い満月」二五四頁、『川端康成全集』第二卷、平成十一年。
- (33) カミーユ・フラマリオン『未知の世界へ』、五三頁、大正十三(一九二四)年、アルス。
- Camille Flammation, *L'homme et les problèmes psychiques*, Ernest Flammarion, 1900 (上記版元のエルネスト・フラマリオンはカミーユ・フラマリオンの弟)。
- (34) バルザック著・水野亮訳「徴募兵」(「白樺」第十四号、三六頁、大正十二(一九二三)年。
- Balzac, *Le Réquisitionnaire*, p. 1120, *La Comédie Humaine* X, Bibliothèque de la Pléiade, 1979.
- 新訳、東辰之助訳「徴募兵」、『愛の葛藤・夢魔小説全集』、『國書刊行会』、二〇一六年。
- (35) Balzac, *Louis Lambert*, p. 634, *La Comédie Humaine* XI, Bibliothèque de la Pléiade, 1980.
- 私市保彦訳「ルイ・ランペール」、一二七頁、『神秘の書』、水声社、二〇一三年。
- (36) Balzac, *Louis Lambert*, p. 633, *La Comédie Humaine* XI, Bibliothèque de la Pléiade, 1980.
- 私市保彦訳同書、一二六頁。